

はじめに

出屋敷北十三遺跡は、縄文時代から室町時代にかけての遺跡です。御所 IC 工業団地整備事業に伴って令和3年度から発掘調査をおこなっています。令和7年度の調査地は、遺跡のほぼ中央にあたります。

令和7年度の発掘調査の成果

主に弥生時代から古墳時代の遺構を確認しました。弥生時代の遺構には方形周溝墓と竪穴建物があり、調査区内では流路をはさんで東側に居住域が、西側に墓域が、順次形成されていくことがあきらかになりました。また古墳時代の遺構には方墳があり、流路の東側にまとまることがわかりました。

(1) 弥生時代前期～中期

①流路 調査区の東側で、南から北へ流れる流路を確認しました。出土した土器は古墳時代前期のものが中心ですが、下層から弥生時代前期の土器が出土したことから、弥生時代前期にはすでに存在していたと考えられます。

②竪穴建物群 流路の東側で 17 棟確認しました。出屋敷北十三遺跡では、はじめて確認された遺構です。平面形は直径 5～8 m の円形で、複数の建物跡が重なって確認されており、何度も建て替えられたことがあきらかになりました。

③方形周溝墓群 流路の西側で 14 基確認しました。一辺 11m 程度のものが多く認められます。いずれも後の時代の開発で削られたようで、墳丘盛土や埋葬施設は確認できませんでした。周溝内からは弥生土器や石庖丁などが出土しました。

(2) 古墳時代前期～中期

①方墳群 流路の東側で 9 基確認しました。一辺 10m 程度のものが多く認められます。弥生時代には竪穴建物群が存在していた土地が利用されています。いずれも墳丘盛土や埋葬施設は確認できませんでした。周溝内からは土師器や木製品、小型の円筒埴輪などが出土しました。

令和4～6年度の調査成果

(1) 弥生時代中期

遺跡のほぼ全域で、方形周溝墓を確認しています。これまでに 38 基が確認されており、今年度調査とあわせると 52 基になります。この地域が墓域として利用されたことがあきらかとなりました。

(2) 古墳時代前期～中期

遺跡の中央から東側にかけて、方墳が集中します。本遺跡の周辺で古墳が確認された、はじめての事例です。また、おおむね同じ範囲で複数の木棺墓も確認されました。

まとめ

今回の調査により、弥生時代の墓域と居住域の様相があきらかになりました。弥生時代前期に遺跡の中央で居住域が形成され始め、弥生時代中期まで継続的に営まれました。一方、弥生時代中期には遺跡全体で方形周溝墓が造られ始め、墓域として利用されていきます。

さらに、出屋敷北十三遺跡の南東には方形周溝墓群を有する觀音寺本馬遺跡があり、南西にも方形周溝墓群が確認されています。この地域一帯の方形周溝墓をあわせると 130 基を超える、奈良県最大の方形周溝墓群であることがあきらかになったことは、重要な成果といえます。

出屋敷北十三遺跡

現地説明会資料

2025年12月6日(土)





方形周溝墓出土 石庖丁・弥生土器(東から)



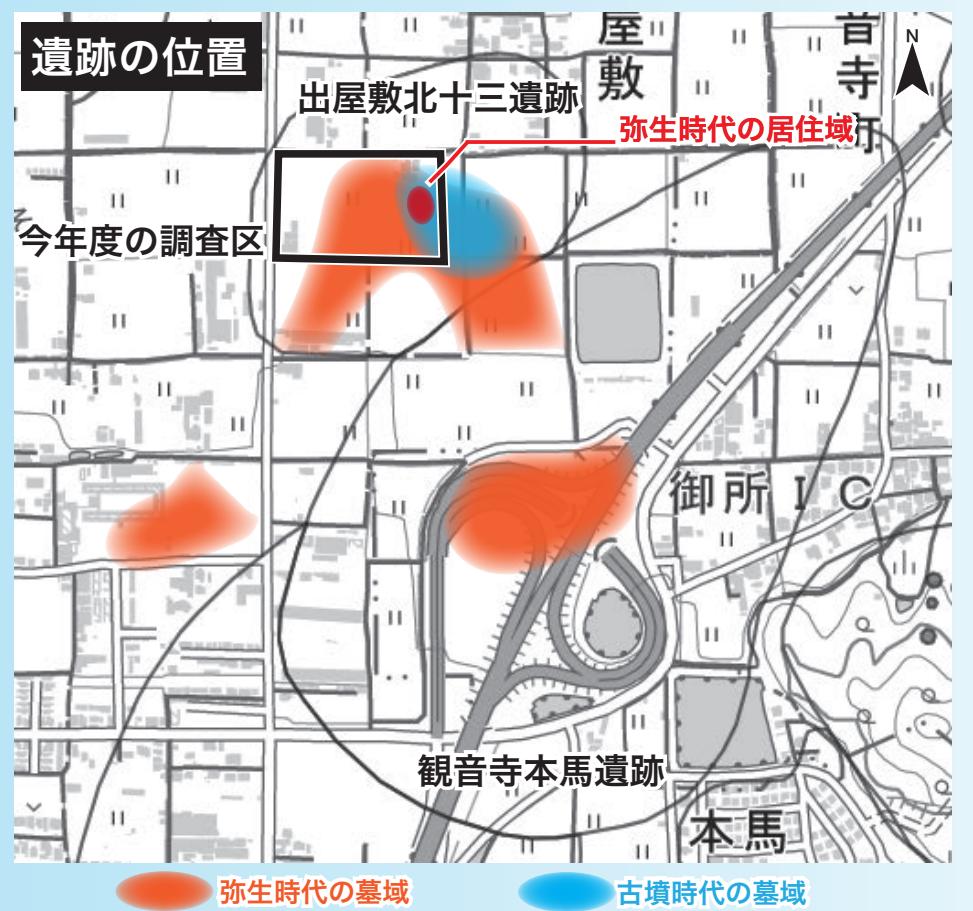
方形周溝墓出土 弥生土器(南東から)



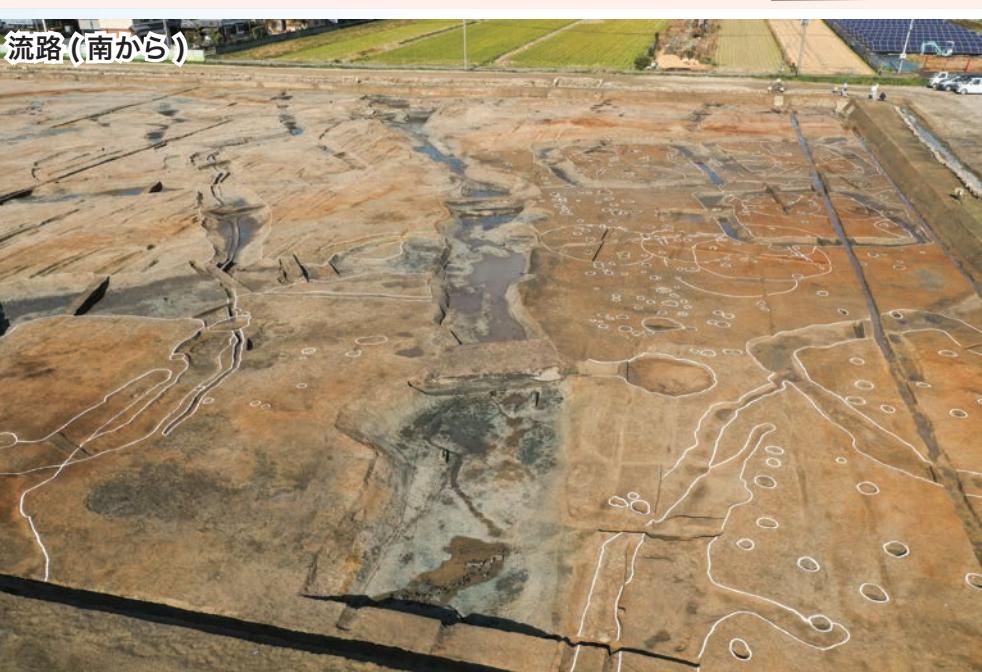
流路出土 木製容器(南東から)



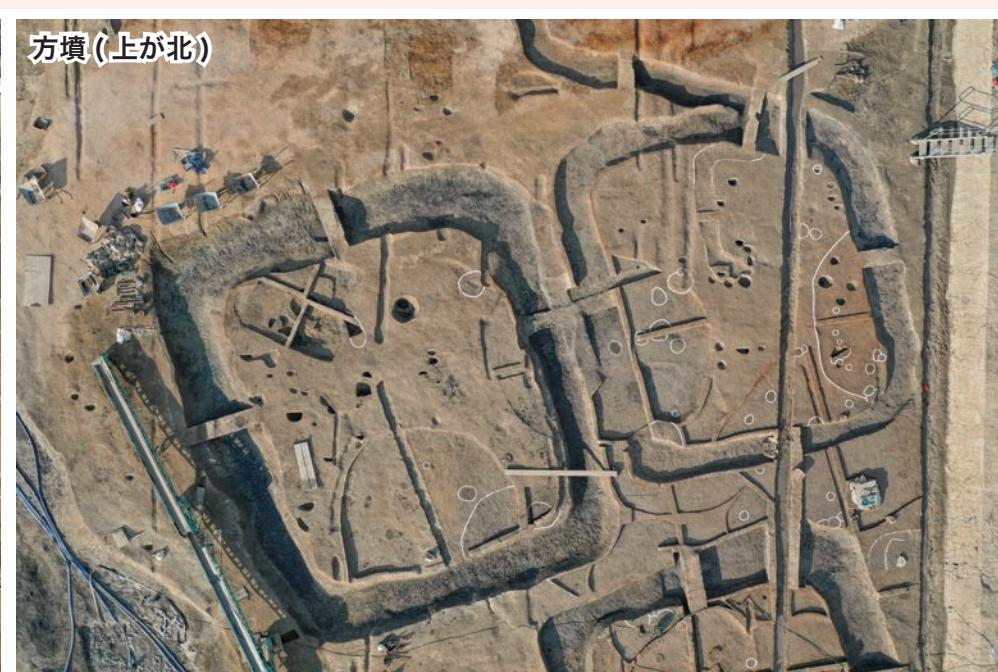
方墳出土 小型円筒埴輪(北から)



方形周溝墓群(北東から)



流路(南から)



方墳(上が北)